北九州市立大学文学部紀要
（人間関係学科）

第 29 巻 抜 刷

看護学の実習におけるシミュレーション教育の学習効果
～臨地実習経験のある学生の学びのレポートからの分析～

御手洗　みどり　　櫟　　直　美　　楠　　凡　之

Learning effect of simulation education in nursing clinical practicum
～ Analysis from learning reports of students with clinical practice experience ～

Midori Mitarai　　Naomi Ichiki　　Hiroyuki Kusunoki

北九州市立大学文学部

2022 年 3 月発行

北九州市立大学文学部紀要（人間関係学科）2022 第29巻 19～30

看護学の実習におけるシミュレーション教育の学習効果
～臨地実習経験のある学生の学びのレポートからの分析～

御手洗　みどり[1]　　櫟　　直　美[2]　　楠　　凡　之[3]

Learning effect of simulation education in nursing clinical practicum
～ Analysis from learning reports of students with clinical practice experience ～

Midori Mitarai　　Naomi Ichiki　　Hiroyuki Kusunoki

要約

看護基礎教育において臨地実習は看護実践能力を培うために極めて重要な過程であるが、同時に臨地実習では経験ができない技術の修得や看護実践能力の強化にシミュレーション教育の必要性も高まっている。そこで今回臨地実習の代替としてシミュレーション教育を導入した看護学実習を行った看護学部４年生の学びを検証し、その効果と課題を明らかにすることを目的とした。

研究対象者は看護学科４年生の老年看護学におけるシミュレーション教育を導入した履修者15人のうち，調査への同意を得られた13名。研究の分析方法は学生の学びのレポートから本実習での学習効果についてのデータを意味内容ごとに分節にわけ、内容分析を行い、複数の研究者で合議した。老年看護学実習のシミュレーション教育の概要は、学生は１人の患者を２～３人で担当するパートナーシップ制を導入。模擬患者は教員が演じ、病院入院中と施設入所中と設定した。臨床より看護師と理学療法士１名を配置した。実習の流れは情報収集、看護過程の展開、レクレーション企画と退院支援も行った。結果として、学生のレディネスやニーズに基づき模擬患者や教材を工夫することでリアリティを促進できたこと。他職種カンファレンスや専門職の直接的な指導で学生の集中力を持続させ、やる気を向上させたこと。パートナーシップ制の体験と実習後のデブリーフィングにて看護の傾向と態度への気づきができたとの効果があった。今回の実習では臨地実習と同様の学習効果が得られた。

キーワード：シミュレーション教育・学習効果・老年看護学実習

Keyword：simulation education・Learning effect・gerontological nursing practice

[1] 山口大学大学院医学系研究科保健学専攻
[2] 福岡県立大学看護学部
[3] 北九州市立大学文学部人間関係学科

はじめに

看護基礎教育において臨地実習の目的とは[1)]、病院、施設、在宅、地域等の多様な場において、多様な人を対象として援助することを通して、学生が知識・技術・態度の統合を図ると共に、対象者との関係形成やチーム医療において必要な対人関係形成能力を養い、看護専門職としての批判的・創造的思考力と問題解決能力の醸成、高い倫理観と自己の在り方を省察する能力を身に付けることを目指す[1)]としている。すなわち現実の場面のみがつくり出す看護する喜びや難しさを経験する臨地実習は看護実践能力を培うために極めて重要な過程である。しかし、近年医療の高度化や高齢患者の疾患の複雑化などの要因から、臨地実習での看護実践の困難さも課題とされており、看護教育の内容と方法に関する検討会報告書[2)]では、看護師に求められる実践能力を育成するための教育方法として学内でシミュレーション教育の導入の必要性が示唆された。

今回看護系大学生（以下学生と略す）が臨地での実習が困難となり、老年看護学実習が代替実習として学内での実習へ変更となった。そこで、学内実習において看護実践能力を育成するため、学習者が看護ケアを経験し、振り返り、知識・技術・態度の統合を目指して、今回の老年看護学実習にシミュレーション教育を導入した実習を行った。

阿部は[2)]「シミュレーション教育とは、実際の臨地場面を模擬的に再現して、その学習環境下で学習者が実際に経験し、それを振り返り知識と技術を統合していくことから実践力を向上させる教育」と述べている。また、シミュレーションによる学習の種類として、個人のアセスメント能力やチームの連携をはかるシチュエーション・ベースド・トレーニングも導入した。シチュエーション・ベースド・トレーニングとは[3)]、「臨地で遭遇する患者さんの状況を取り上げていく状況に基づいたシミュレーションと、実際の臨地を取りあげて問題を解決していく思考過程のトレーニングと、チーム連携の強化などの実践に活かせる学習が可能となる」と言われている。より、臨地に近い形で実習することで、リアリティ感を体験することを目的にした。

そこで、本研究では、臨地での実習経験のある老年看護学実習をシミュレーション教育で体験した学生に対し、実習の学びを検証し、その学習効果と課題を明らかにすることを目的とした。

Ⅰ、研究方法

1、研究デザイン：質的帰納的研究

2、研究対象者

1）研究対象者：A 看護大学看護学科 4 年生の臨地での実習経験がある 15 名で老年看護学実習をシミュレーション教育の履修者で書面と口頭での調査への同意を得らえた 13 名

2）募集方法

①研究対象施設の A 大学へ研究の主旨を説明し、研究依頼を行う

②研究対象施設に研究同意を得られた場合、A 大学の学部の学生掲示板と老年看護学教室へ研究の目的や主旨を説明し研究協力への意向を示す対象者の募集を行う

③研究対象者が研究の説明を聞いてもよいと同意が得られた場合、研究の主旨を説明し、同意を得る

④研究同意書を学生に署名を頂いた時点から研究対象者とする

3、研究期間：2020 年 11 月末から 2021 年 3 月まで

4、データの分析方法

老年看護学終了後に提出した「老年看護学の実習学びレポート」からシミュレーション教育での学習効果についてのデータを、意味内容ごとに文節を分け、内容分析を行った。

次に得られたデータを熟読し、データ間の類似点や相違点の確認を繰り返し行い、逐語録を作成し、文脈を取り出しコード化する。抽出・コード化の過程において、信頼性・妥当性の確保をするために研究者間で一致するまで検討を重ねる。

5、倫理的配慮

研究対象施設の学部長に書面と口頭で研究の主旨、目的、方法、プライバシーの保護の方法について説明し、協力同意を同意書にて同意を得られた。その後、研究対象者にも同様、研究の主旨、目的、方法、プライバシー保護の方法を書面と口頭にて行い、また研究の協力の有無や不参加途中放棄により不利益を被ることがないことも説明し、同意書にて同意を得られた。

本研究は北九州市立大学研究倫理審査委員会の承認を得て行った（承認番号 20-10）。

II、老年看護学実習のシミュレーション教育の概要

老年看護学実習の目的は、「老年期にある人の特徴を理解し、健康生活を支援する基礎的な看護実践能力を養うこと」とした。

実習目標として、1 つ目は、「老年期にある人の症状について加齢の変化や疾患と関連付け、その症状が生活に及ぼす影響について理解し全体像を記述できる」。2 つ目は、「ケアリング関係を基盤に老年期にある人や共に生きる家族の生活の質を考えた安全で安楽な看護が実践できる」。3 つ目は、「老年期にある人や共に生きる家族をサポートするシステムを知り、多職種における看護師の役割について理解し記述できる」。4 つ目に、「老年期にある人や共に生きる家族に対する、自分の傾向や態度に気づき、記述できる」。5 つ目は、「専門職として看護倫理を踏まえた老年看護を実践できる」とした。

1、 実習期間：3 週間（月・火・木・金の週 4 回）

2、 実習環境

看護学科のワンフロア―を病棟と老人保健施設と設定した。病室 3 部屋（2 人部屋）とナース

ステーション、浴室、身障者トイレ（学内備え付け）を利用した。患者のカルテは紙カルテとし、毎日患者の状態を記録用紙に記入した。

3、 感染対策

学生には、朝の実習前と昼の実習前に検温と健康チェックを教員が行ない、実習を行った。実習中は学生、模擬患者もマスクの着用をし、接触がある看護技術に関しては、フェイスシールドの着用を促した。また、各部屋の前には、アルコール消毒にて入出室をするように指導した。学生は模擬患者に関わる以外は２グループずつに各３部屋に分かれて待機し、密にならないように、フイルムの敷居をテーブルに設置した。部屋は常時窓とドアの解放を行った。

4、 模擬患者

模擬患者は６名。患者は病院入院中の腎不全、心不全、腰椎圧迫骨折の男性３名、施設入所中の認知症、脳梗塞後遺症、パーキンソン病の女性３名で、教員がそれぞれ２名ずつ演じた。高齢者に特有な身体症状として、夜間せん妄及び転倒転落の場面を看護記録に記載し、翌日の看護の課題の場面を設定した。また、コロナ渦で面会の制限を行っている設定も行った。

5、 外部からの専門職の指導

看護師は20年以上の臨床経験があり、学生指導の経験も10年ある。臨地と同様、朝の計画発表、バイタルサイン測定の報告、相談、指導、看護技術を臨地同様に一緒に行った。

理学療法士は、臨床経験20年以上の高齢者のケアを専門に行っている。週に１回実習に参加し、患者の疾患に合わせた個別のリハビリ指導や高齢者のレクレーションの企画方法や指導を行った。

6、 パートナーシップ制の導入

１人の患者を学生２～３名で担当し、パートナーシップ制での看護を行った。

7、 シミュレーション教育での看護技術内容

バイタルサイン測定、清潔・排泄介助、食事介助、移動介助、環境整備、薬剤投薬（点滴・内服・自己注射など）、退院指導（退院カンファレンスや家族本人指導）等、疾患に関わる日常生活援助を主に行った。

8、 その他のシミュレーション教育の参加者

実習の流れに応じて、患者家族やケアマネージャー経験のある教員なども退院カンファレンスや家族の面会の設定に応じて、参加した。

9、 シミュレーション教育の流れ

１チーム４人から５人とし、それぞれ２人から３人で１人の患者を担当するパートナーシップ制を組んだ。学生が患者との関わりの時間を午前午後各１時間とし、臨地看護師を１名配置した。まず、臨地看護師に本日の行動計画や実習目標を報告した。次に学生は紙カルテから今朝までの看

護記録から情報収集を行う。情報収集に必要な患者記録は紙カルテとし、患者役の教員が日々の状態を記載し、学生の看護ケアにより、状況を変化させていった。その情報から学生はチームでアセスメントをし、臨床推論を行い看護実践に繋げていく。1時間の看護実践後、チームで振り返りの時間を設けた。さらに、毎日カンファレンスでのチームでの振り返りを、実習終了後模擬患者を演じた担当教員と共に、デブリーフィングセッション（振り返り）を行い、翌日につなげていった。その他､実習を行いながらレクレーション企画と退院に向けてのケアプランの作成も行った（図1）。

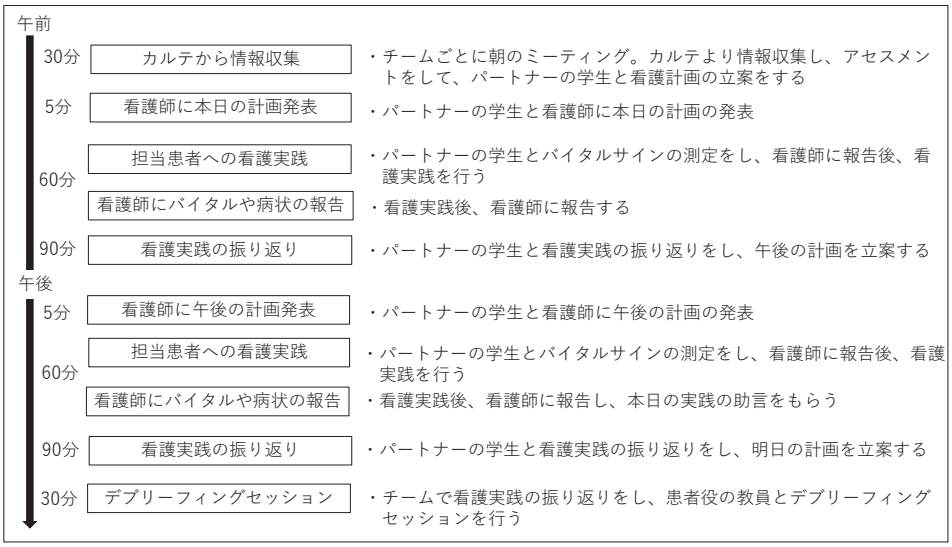

図1　シミュレーション教育の流れ

Ⅲ　結果

老年看護学実習のシミュレーション教育では、３つの要素と６つにカテゴリーから構成された（表１）。

表１　シミュレーション教育を構成する要素とカテゴリー

構成要素	カテゴリー
老年看護学実習での特徴的な学び	高齢者の理解
	高齢者の疾患の特徴
	高齢者を取り巻く環境、支える資源
リアリティ促進による集中力の維持	臨床看護師、理学療法士からの継続的な指導やケアマネージャーや家族の参加
	模擬患者の教材や環境の工夫
体験の意味づけ	パートナーシップ制やチームによる振り返りの充実

１、老年看護学実習での特徴的な学びについて

老年看護学実習での特徴的な学びでは「高齢者の理解」「高齢者の疾患の特徴」「高齢者を取り巻く環境、支える資源」の３つのカテゴリー―で構成された（表２）。

表２　老年看護学実習での特徴的な学び

構成要素	カテゴリー	サブカテゴリー
老年看護学実習での特徴的な学び	高齢者の理解	・病気の治療が優先ではない ・残された人生をより良く生きること ・患者と看護者の相互作用 ・人生を統合するプロセスの支援 ・マズローの5段階の欲求からの展開 ・自尊心の低下に配慮した倫理的な態度 ・寄り添う看護、教育ではなく提案 ・強みを生かした支援と関わり ・その人らしさ、自分が望む生活への支援 ・価値観や生活習慣を大切にする ・行動変容は難しい、生活スタイルを尊重 ・患者の希望のために看護する
	高齢者の疾患の特徴	・加齢の変化と基礎疾患・自尊心への配慮 ・慢性疾患と自己の管理 ・転倒のリスクが高い ・認知機能の低下や身体機能の低下 ・多くの疾患を患っている ・喪失体験からの精神症状や鬱 ・疾患だけではなく加齢の変化 ・誤嚥性肺炎のリスクが高い
	高齢者を取り巻く環境、支える資源	・保険制度・社会資源・家族支援・精神的な支援 ・周囲の環境の支えの必要性・社会資源の活用 ・家族指導、多職種との調整 ・患者のニーズに応じた多職種連携 ・早い段階での多職種連携 ・社会資源の活用 ・サポート体制、多職種と連携 ・家族へのサポートの重要性（生活する上での必要なサポート） ・チームで話し合い患者にとって最善な方法を考える

１）「高齢者の理解」では、12つのサブカテゴリーから構成され、人生の終焉を迎える高齢者の身体的・精神的・社会的な面をとらえる内容であった。高齢者の特徴をつかみ、倫理的な面とし

て人となりやQOL、患者の希望に対して目を向け、適切な支援の方法も考えることができた。

２）「高齢者の疾患の特徴」では、８つのサブカテゴリーから構成され、慢性的な疾患が及ぼす影響や多くの疾患を抱えていることや、疾患からくる２次的な精神的、身体的障害について捉えていた。

３）「高齢者を取り巻く環境、支える資源」では、９つのサブカテゴリーから構成され、多職種連携や家族支援、保健制度など、チームで医療を支えることについて学ぶことができていた。また、家族へのサポートなど患者を取り巻く環境の資源の活用方法を、実際にケアマネージャーを迎えることでより深く理解できていた。

2、リアリティ促進による集中力の持続について

リアリティ促進による集中力の持続では、「臨床看護師、理学療法士からの継続的な指導やケアマネージャーや家族の参加」「模擬患者の教材や環境の工夫」の２つのサブカテゴリーから構成された（表3）。

表３　リアリティ促進による集中力の持続

構成要素	カテゴリー	サブカテゴリー
リアリティ促進による集中力の持続	臨床看護師、理学療法士からの継続的な指導やケアマネージャーや家族の参加	・心が動けば体も動く精神的な面の学び ・ADLに維持や残存機能を活かしたケア ・生活の中で人生を楽しむ環境づくり ・理学療法士の個人指導での深い学び ・レクレーションをどのように行うかとその効果 ・多職種との連携・ケアマネージャー・臨床の看護師や理学療法士と時間をかけた議論 ・在宅を踏まえた支援 ・情報共有の重要さ ・看護する上で目的と根拠を持ち実施すること ・家族との話し合い
	模擬患者の教材や環境の工夫	・病院にはないもので、色々な道具を組み合わせて作るアートのような看護 ・自分たちのやる気や学ぶ姿勢に対して教員が準備した環境により多くのことが学べた ・初めての実習内容で不安だったが、臨床に近い形で実習ができた ・臨床ではわからなかった自分の至らなさを確認できた ・臨床での実習以外でもこのような臨場感がある体験ができた

１）「臨床看護師、理学療法士からの継続的な指導やケアマネージャーや家族の参加」は、10個のサブカテゴリーから構成され、専門的な知識の教授や臨地ではできない理学療法士や他職種との時間を取った話し合いができて、広い視点で深く高齢者のケアを学べていた。病院や施設を想定したレクリエーション企画を理学療法士と行うことで、レクリエーションの身体的・精神的な効果を学ぶことができていた。また、病院や施設で関わることができないケアマネージャーとの連携会議を通してコロナ渦での在宅を踏まえた支援の必要性を学ぶことができていた。

２）「模擬患者の教材や環境の工夫」は４つのサブカテゴリーから構成され、実際の病院や施設ではなく、実在の患者ではないシミュレーション教育を導入し、教員が伝えたいことを形にし、

リアリティの表現することで学生がそれに応えて実習していることが分かった。また。今まで経験したことがない環境下での実習への不安や、今まで病院での実習が当たり前であったことを踏まえての新たな経験で、自分自身の看護の傾向や実習での態度を振り返ることができていた。

3、体験の意味づけについて

体験の意味づけは、「パートナーシップ制やチームによる振り返りの充実」の１つのサブカテゴリーから構成された（表 4）。

表４　体験の意味づけ

構成要素	カテゴリー	サブカテゴリー
体験の意味づけ	パートナーシップ制やチームによる振り返りの充実	・ペアで受け持つことでの気づきと連携方法 ・チームでの意見交換・カンファレンスの重要性 ・看護師間の情報連携の大切さ・チームワークの重要性 ・パートナーシップのメリットとデメリット。振り返りを２人でできるがお互いの能力の差 ・ペアで実施すること、信頼関係の構築が学べた ・ペアの学生と客観的に考えることができた ・不安があったが病院ではできない体験ができた ・不安があったが、教員や看護師、仲間で支えで貴重な体験が行えた ・コロナ禍での病院での家族と患者への支援の方法が学べた

1）「パートナーシップ制やチームによる振り返りの充実」は、９つのサブカテゴリーから構成され、チームやペアで業務を遂行する上での連携方法や難しさを体験していることが分かった。また、臨地実習では行っていないパートナーシップ制の導入を実際に体験することで学びの深まりにつながっていることが分かった。

以上の結果より､老年看護学実習のシミュレーション実習では老年期にある人を理解すると共に、健康生活を支援するため「疾患と加齢の変化」「QOL の向上」「本人及び家族へのサポート」「老年看護実習を通しての自身の看護の傾向と態度の気づき」「倫理観を踏まえた看護の実践」を目標としていたが、今回の実習で学生のレポートからあげられた中にすべての要素が含まれていた。

また、シミュレーション教育を導入した実習だから行えた、臨地の看護師や理学療法士の指導や、教員が学んでほしい内容を患者として演じることで、新しい気づきや学びにつながっていた。

Ⅳ　考察

1、老年看護学実習での特徴的な学びについて

老年看護学実習での特徴的な学びとして「高齢者の理解」「高齢者の疾患の特徴」「高齢者を取り巻く環境、支える資源」と３つのカテゴリーが導き出された。その結果より、実習目標にあげられていた、「老年期にある人の症状について加齢の変化や疾患と関連付け、その症状が生活

に及ぼす影響について理解し、全体像を記述できる」「ケアリング関係を基盤に老年期にある人や共に生きる家族の生活の質を考えた安全で安楽な看護が実践できる」「専門職として看護倫理を踏まえた老年看護を実践できる」は達成できていたと考えられる。また、シチュエーション・ベースド・トレーニングを導入し、転倒転落やせん妄など高齢者に起こりやすい状況を模擬患者として教員が演じることで、問題を解決していく思考のトレーニングを行い、老年看護の特徴的な学びが深まったと考えられる。

2、リアリティ促進による集中力の持続について

リアリティ促進による集中力の持続では、「臨床看護師、理学療法士からの継続的な指導やケアマネージャーや家族の参加」「模擬患者の教材や環境の工夫」の３つのカテゴリーが導き出された。その結果より、実習目標である「老年期にある人や共に生きる家族をサポートするシステムを知り、多職種における看護師の役割について理解し記述できる」は達成できていたと考えられる。病院でも関わる職種でも実際業務の忙しさのため学生がなかなか質問できないことでも、今回のシミュレーション教育を導入した実習では、じっくり話し合い協議する時間が持てたことも成果の要因であった。またコロナ渦で面会が行えない家族との連携をどう行うか、教員が模擬患者を演じる上で、疾患や年齢から考えてもらいたい問題をとりあげるなど、今社会で起きている現実的な問題にどう看護師として向き合っていくかなども取り入れることで、リアリティ促進による集中力の持続が促進されたと考えられた。

3、体験の意味づけについて

「パートナーシップ制やチームによる振り返りの充実」のカテゴリーが導き出された。その結果、実習の目標である「老年期にある人や共に生きる家族に対する、自分の傾向や態度に気づき、記述できる」は達成できていたと考えられる。今回の実習では、模擬患者に接する時間が少ないため、パートナーシップ制を導入し、情報収集の方法や仕事の分担や時間の使い方など、効率的に動くことを目的とした。しかし、導入したパートナーシップ制からは、１人に対して２人でどのように看護の展開をしていくのかは、自分自身の看護展開の傾向や患者に対する態度を客観的に見ることに効果があったと考えられる。また、チームワークの重要さや看護師同士の情報交換の方法などについては、今まで実習で体験していなかったことから、学びが大きかったと考えられる。実際に医療現場ではパートナーシップ制を取り入れている病院は多いことから、その意味でも効果的な実習が行えたと考えられる（図２)。

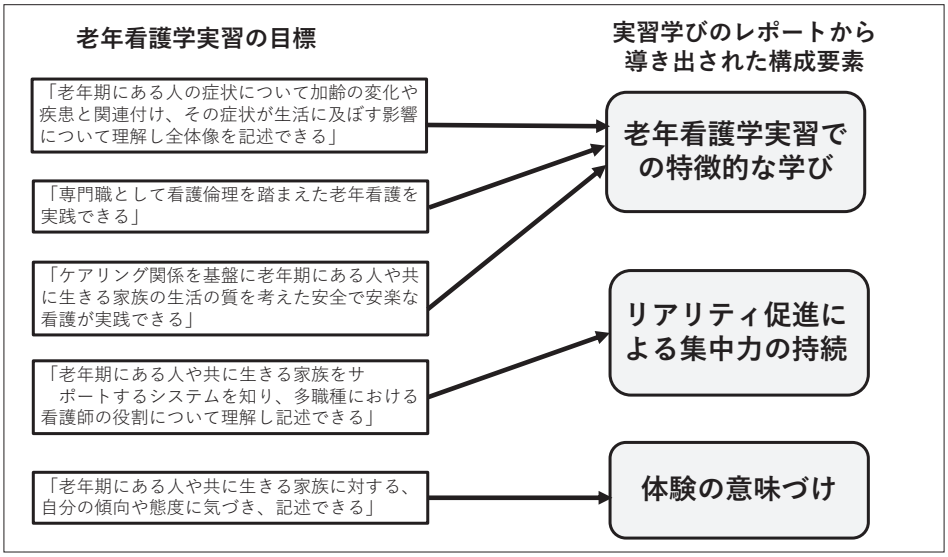

図２　老年看護学実習の目標と実習学びのレポートから導きだされたカテゴリー

以上のことから、今回の実習では、また、学生のレディネス（学習者の学習課題に対する身体的・精神的・社会的成熟、既習の知識・技術・態度と経験に関わる準備状態）やニーズに基づき模擬患者や教材を工夫することでリアリティを促進できたと考えられる。
また、パートナーシップ制や他職種カンファレンスや専門職（理学療法士、臨地看護師、ケアマネージャー）の直接的な指導では、リアリティ促進もだが、集中力ややる気の向上も行えた。

また、シミュレーション教育を導入した実習終了後はデブリーフィングセッションを行った。デブリーフィングセッションとは[4)]、「学習者が自ら行ったことを思い出したり、指導者や周囲の仲間からのフィードバックによって気づいたりしながら、シミュレーションセッションでの知識・技術・態度などを仲間と共に分析し、さらに良い実践とするための課題について検討するという、シミュレーション教育の中でも最も重要なセッションである」と言われている。このセッションで行動の裏にある思考の過程やその場その場で抱いた感情を模擬患者であった教員と共に考えることで学生は自分自身の物事を捉える認知の仕方を学び、自分の看護の傾向や態度を知ることができたと考えられる（図３）。

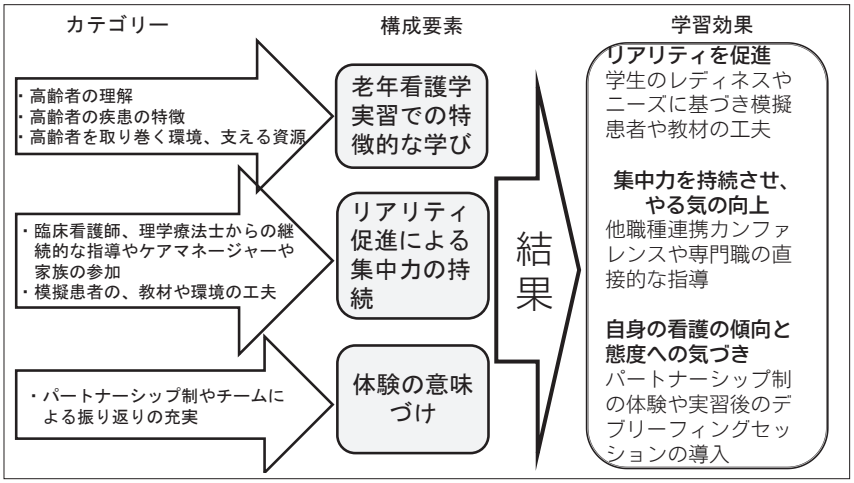

図３　シミュレーション教育の学習効果

Ⅴ　まとめと今後の課題

今回、老年看護学実習をシミュレーション教育で行ったが、学生のレディネスやニーズに基づき模擬患者や教材を工夫することで「リアリティを促進」できたこと。他職種カンファレンスや専門職の直接的な指導で学生の「集中力を持続させやる気を向上」させたこと。パートナーシップ制の体験と実習後のデブリーフィングにて「自身の看護の傾向と態度への気づき」ができたという、3つの効果があった。以上の事から、臨地実習と同様の学習効果があったと考えられた。しかし、今回のシミュレーション教育の学習効果は、質的な分析のみで得られた結果であり、効果を検証するためには量的に評価する必要もある。また、今回は老年看護学実習で行ったが、他の看護学領域でも同じような学習効果が得られるかの検証は必要であり、今後の課題としていきたい。

Ⅵ　引用文献

1）日本看護系大學協議会：看護学実習ガイドライン , 日本看護系大学協議会看護学教育向上委員会資料 , https://www.mext.go.jp/content/20200 1 1 4-mxt_igaku-00 1 26_1.pdf　最終アクセス 2021 年 12 月 10 日

2）厚生労働省，看護教育の方法と内容に関する検討会報告 https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r985200000013l6y-att/2r98520000013lbh.pdf　最終アクセス 2021 年 12 月 15 日

3）阿部幸恵：看護のためのシミュレーション教育　はじめの一歩ワークブック , 日本看護協会出版会 , ｐ 6 ,2013

4）3）ｐｐ 9 － 10

5）3）ｐ 112

看護学の実習におけるシミュレーション教育の学習効果
～臨地実習経験のある学生の学びのレポートからの分析～

Learning effect of simulation education in nursing clinical practicum
～ Analysis from learning reports of students with clinical practice experience ～

Midori Mitarai　Naomi Ichiki　Hiroyuki Kusunoki

Abstract

In basic nursing education, clinical practicum is an extremely important process to cultivate practical nursing competence.

Moreover, there is a growing need of simulation education to offer students skills that cannot be acquired in clinical practicum and to strengthen their practical nursing competence.

Thus, the purpose of this study was to examine the learning of the fourth-year students in the Faculty of Nursing who had nursing clinical practicum with simulation education as an alternative to clinical practicum, and to clarify the effects and problems.

The participants were 13 of 15 students who took classes with simulation education in gerontological nursing and consented to participation in this study.

In the analysis phase, the data gained from students' learning reports was divided into sections by semantic content and analyzed. After the content analysis, we discussed to check the integrity.

The outline of simulation education for gerontological nursing practice is the introduction of a partnership system in which two to three students are responsible for one patient.

A teacher played the role of patients and was set to be in the hospital and nursing home.

Moreover, a nurse and a physiotherapist were staffed from their clinical sites to instruct students.

The flow of the practicum included information gathering, development of the nursing process, recreation planning, and discharge support.

As a result, using simulated patients and devising teaching materials based on students' readiness and needs offer a higher level of reality.

Conferences with different healthcare workers and direct guidance from the professionals helped students improve their attention and motivation to learn nursing.

It was effective that students became able to notice their tendency and attitude to nursing through the experience of the partnership system and the post-practicum debriefing.

This practicum had the same learning effect as clinical practicum.